OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津博歴だより

2019
No.
114

contents

特集 P1～P3 令和元年度の大津市歴史博物館について
学芸員のノートから P4～P5 親子で楽しめる博物館へ 夏休み子ども向けワークショップ
活動報告 P5 パリ大津絵展開催記念シンポジウム「大津絵・民芸・ヨーロッパ」
収蔵品紹介 P6 重要文化財 釈迦如来坐像 圓福院蔵

大津市歴史博物館
令和元年5月20日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

特集

令和元年度の大津市歴史博物館について

企画展「大津絵 －ヨーロッパの視点から－」
大津絵　鬼念仏　個人蔵　江戸時代

企画展「大津南部の仏像 －旧栗太郡の神仏－」
重要文化財　薬師如来坐像　法楽寺蔵　平安時代

企画展「江戸時代の琵琶湖水運」
重要文化財　大津百艘船万留帳　個人蔵　江戸時代

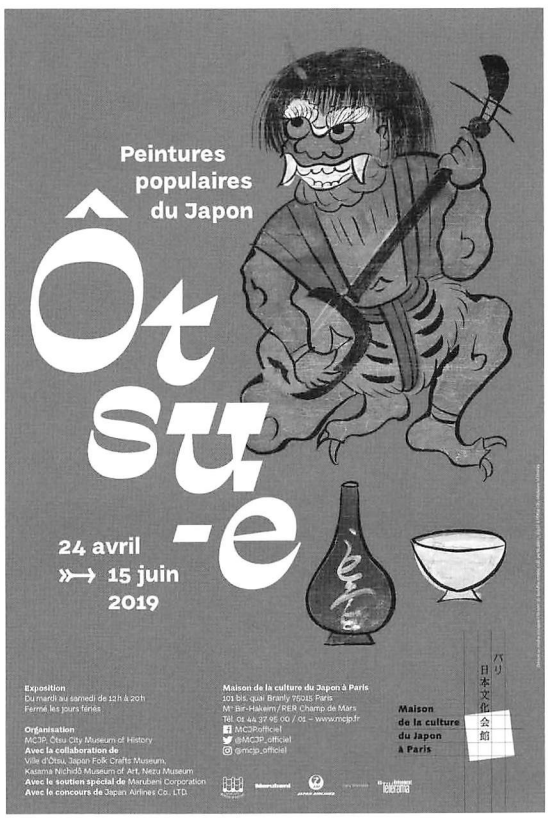
大津歴博だよりのリニューアルと今年度の博物館

『大津歴博だより』は、平成２年（1990）の創刊号の発行以来、おおよそ年４回のペースで、博物館に関わる様々な情報をお知らせしてきました。

平成の時代が終わり、令和へと年号が変わりました。これを機にというわけでもありませんが、７年ぶりに『大津歴博だより』も、今号から衣替えをしました。

これまでは、企画展やミニ企画展など、展覧会の開催告知を中心に記事を構成してきましたが、近年ではページ数の制約を受けないホームページのほうが、写真を豊富に使って博物館の情報をご提供できるようになりました。そこで新しい『大津歴博だより』では、展覧会だけでなく、調査研究や日頃の博物館活動で学芸員が発見したことや感じたことを、読み物形式でお伝えする構成にしました。しばらくは試行錯誤の紙面づくりになりますが、よろしくお付き合いくださいますようお願いします。

さて、リニューアル後の１号目は、今年度の博物館の動きをいち早くお伝えします。今年度の博物館は、通常の展覧会に加えて、大きく２つの動きがあります。ひとつは、パリで開催される「大津絵展」に関連した取り組み、もうひとつは、令和２年（2020）１月からスタートする、ＮＨＫ大河ドラマ「麒麟がくる」にあわせた取り組みです。



パリ日本文化会館の展覧会ポスター

パリで開催される「大津絵展」にあわせた取り組み

現在、フランス・パリにあるパリ日本文化会館では、ヨーロッパで開催される初の大規模な大津絵展として、４月24日から６月15日まで「OTSU-E : peintures populaire du Japon（大津絵－日本の庶民絵画－）」が、当館との共催で開催されています。大津歴博では、この機会に国内でも大津絵をより身近に、より深く知っていただきたく、昨年12月の「大津絵シンポジウム」に続き、今年度もいくつかの催し物を行ないます。

◇常設展示室の大津絵コーナーの充実

昨年の大津絵シンポジウムに寄せられた感想の中に、大津絵を常に数多く鑑賞できる場所が欲しいというご要望がありました。大津絵は脆弱なこともあり、これまで作品点数を限定して展示してきましたが、近年では当館の収蔵品が充実したことから、常設展示室の大津百町コーナーを改修し、大津絵の展示を充実させることになりました。改修後は軸装の大津絵10幅（これまでは５幅）のほか、彫刻や大津絵人形などの関係資料20点以上を展示し、いつでも大津絵の魅力に親しんでいただけるようになります。

改装予定の大津絵（大津の名産）コーナー（現状）

◇企画展「大津絵　－ヨーロッパの視点から－」

会期：令和元年10月12日（土）～11月24日（日）

フランス・パリでの大津絵展では、ヨーロッパに所在している大津絵が多数展示されています。大津絵は、戦前からフランスのルロワ＝グーランやミロ、ピカソなどの芸術家によって見いだされていました。大津歴博の秋の展覧会では、パリで行なわれた大津絵展の様子をお知らせするため、ヨーロッパの文化人や芸術家の視点からみた大津絵というテーマで展示します。会場では、大津絵と欧米との関係をパネル等で紹介するとともに、パリへ出品された大津絵を含む約50点を展示予定です。

NHK大河ドラマを契機とした常設展示改修

令和２年１月から明智光秀を題材にしたNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が放映されることにあわせて、歴史博物館では展覧会や講演会など、大津市の観光誘致と連動しながら、様々な催しを準備しています。

◇特集展示「明智光秀と戦国の大津」

明智光秀や坂本城など、戦国時代に登場する大津ゆかりの人物や場所、出来事を紹介する特集展示「明智光秀と戦国の大津（仮称）」を常設展示室で開催します。現在の常設展示の比叡とその山麓コーナーから大津百町コーナーまでを使った展示です。

また、常設展示室内の近江八景コーナーにあったビデオシアター（休止中）を改修し、明智光秀ゆかりの市内の史跡を案内するＶＴＲを上映し、観覧後の史跡めぐりの参考にしていただければと考えています。令和２年１月オープンの予定です。

また、令和2年の夏から冬にかけては、関連するミニ企画展等を追加していく予定です。

市指定文化財　明智光秀書状　個人蔵　元亀２年（1571）

企画展示

今年度は、他にも秋と春の２つの展覧会を予定しています。皆様のご要望の多い仏像の展覧会と平成30年に新たに重要文化財に指定された古文書を展示します。

◇企画展「大津南部の仏像 ―旧栗太郡の神仏―」

会期：令和元年10月12日（土）～11月24日（日）

大津市の瀬田川から東の地域は、現在の草津市や栗東市、守山市の一部をあわせて、かつて栗太郡（くりたぐん）と呼ばれていました。7世紀の大津遷都の際には、この地域には白鳳寺院が多く建ち並び、8世紀には近江国庁が造営され、近江国一宮、建部大社がまつられるなど、近江国の中心地でした。また、藤原京や平城京・東大寺大仏造営のための木材などの資材を田上山や大石山から供給し、常に飛鳥や奈良と直結した関係を有していました。平安時代には天台宗や真言宗の寺院を中心に山岳寺院や社が多く建立され、さらに中世には浄土宗や浄土真宗の活動も活発にみられるなど、大津市南部をはじめとした旧栗太郡の地域は、古い仏像が集中的に現存する我が国屈指のエリアとして知られています。

本展では、大津市南部周辺に伝わる仏像や神像、仏画や経典などを紹介します。

◇企画展「江戸時代の琵琶湖水運」

会期：令和２年２月29日（土）～４月12日（日）

平成30年10月、大津百艘船仲間によって代々保有されてきた史料群「大津百艘船関係資料」が国の重要文化財に指定されました。春の展覧会は、これを記念して開催する展覧会です。

大津百艘船は、江戸時代を通じて琵琶湖水運を担った集団でした。彼らは諸大名の年貢米や物資が集まる大津港の輸送を特権的に担い、湖岸の浦々との争論を繰り返しながら、その地位を保持してきました。展覧会では、新指定文化財や関連する史料の数々から、江戸時代の琵琶湖水運の歴史を紹介します。

◇ミニ企画展やその他の取り組み

ミニ企画展は、大規模な大津絵の展覧会を開催するため、恒例の「大津絵蔵出し展」はお休みしますが、廃線から50年を迎える江若鉄道に関する展示のほか、法明院展でご紹介しきれなかった資料の展示、国指定重要無形民俗文化財「大津祭」の復元新調事業に関わる展示など、大津の歴史をとりまく事柄を幅広くご紹介します。

令和元年度の大津市歴史博物館は、展覧会をはじめ、例年以上に様々な事業に取り組んでいきます。特に常設展示の衣替えは、平成19年（2007）以来12年ぶりのことです。ほかにも夏には毎年恒例の夏休みワークショップを多様な体験型イベントとして、リニューアルします。

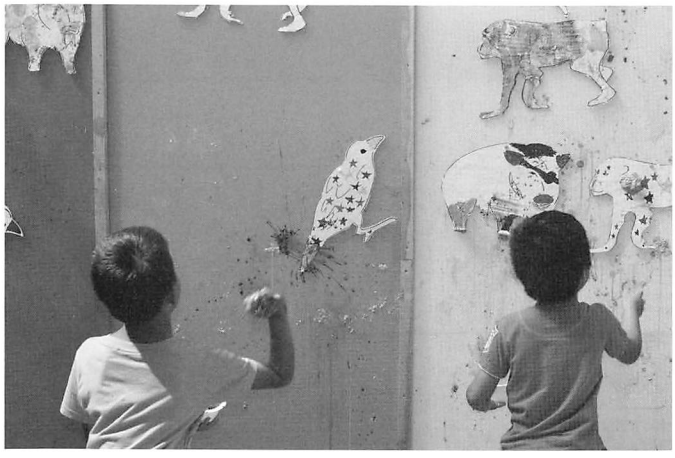
展覧会等の詳細については、今後の『大津歴博だより』やホームページ等を通じて、積極的に発信していきますのでご期待ください！

（学芸員　木津勝）

学芸員のノートから

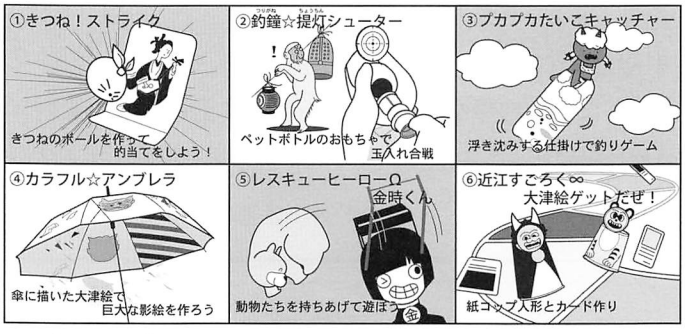
親子で楽しめる博物館へ　夏休み子ども向けワークショップ

当館では、平成14年(2002)から毎年、小中学校の夏休みの時期に合わせて、「夏休みおもちゃづくりワークショップ」と題した子ども向けのイベントをおこなっています。これは、当館が企画し、大津市内の芸術系大学である成安造形大学の協力を得て、共催事業として開催するものです。美術やデザインを専門とする大学生たちが、授業の一環として、ワークショップの企画制作に取り組んでいます。毎年好評で、これまでに約5,350人の子どもたちが参加し、500人以上の大学生が関わってくれています。



平成29年のワークショップのようす

当館での子ども向けイベントは、平成4年の「親子歴史講座」から始まり、石器づくりや和綴じ本づくりなどの体験講座や見学会を定期的におこなってきました。そして、平成14年から始まったおもちゃづくりワークショップでは、博物館と大学が協力し、約半年かけて準備を進め、例年7月末～8月中旬にかけて開催しています。これまでは、前半1週間で様々なおもちゃを作るワークショップを12回程開催し、その翌週に子どもたちが作った作品を展示するという形を続けてきました。制作するおもちゃは、博物館から提示するテーマに合わせて、大学生が毎年新しいものを考案しています。例えば、平成29年は、夏季企画展「田上てぬぐい ―暮らしと文化―」に合わせて、「田上周辺の昔の暮らしをイメージしたおもちゃ」を作りました。単に懐かしい昔ながらのおもちゃを作るわけではなく、「田んぼでレインボー（虹色の泥を投げて描こう！）」や「あむ・くむ・ビク君（かご細工と魚のダーツ作り）」など、テーマに合わせて、学生たちがユニークなおもちゃを考案しました。昨年は、「大津絵」をテーマとして、「釣鐘☆提灯シューター（ペットボトルのおもちゃで玉入れ合戦）」や「カラフル☆アンブレラ（傘に描いた大津絵で影絵を作ろう！）」など6種類のおもちゃが登場しました。テーマである大津絵の一つの画題や大津絵全体をモチーフにして、おもちゃの形にこだわらず、美術的かつ楽しめる作品づくりという側面が出てくるのも芸術系大学との共同開催ゆえの面白さといえるでしょう。



平成30年（テーマは大津絵）の広報用に学生が制作したイラスト

このワークショップは、大学ではプロジェクト授業の一つに位置付けられ、学生は授業登録をして、年間を通じて取り組んでいます。毎年4月下旬頃には、参加を決めた学生が博物館へ集まり、博物館からテーマとする内容を詳しく解説して、必要な資料を提供します。こちらからお願いすることは、大津の歴史文化に関連したテーマと、小学校低学年の子が1時間ぐらいで楽しく制作できる内容とすることです。実際のワークショップは、1回90分ですが、導入部分に約20分、作ったおもちゃで遊ぶ時間に20分程をみているので、制作にかかるのは30～50分程が理想です。この課題をもとに、学生は班に分かれて、それぞれの専門分野を活かしながら取り組み、5月下旬頃には各班が考案したおもちゃのプレゼンをおこないます。毎年、バラエティ豊かな仕組みのおもちゃが登場するので、このプレゼンはこちらもとても楽しみにしています。この後、当館と大学の担当教員、学生たちからも色々と意見を出し、さらに中身を作り込んでいきます。同時に、市内の小学校を中心に広報するためのチラシ作りも進めます。ここでも学生がイラストやデザインを担当しています。ワークショップの本番では、おもちゃ作りを楽しむとともに、テーマとなった歴史文化についても子どもたちの印象に残るようにしたいという意図から導入部分を工夫してもらっており、紙芝

居や演劇風など、学生たちが趣向を凝らしています。ワークショップの翌週には、子どもたちが作ったおもちゃ作品の展覧会を開催してきましたが、この展示制作も学生が担当しています。

導入としておこなった巻物風紙芝居（平成30年）

長く続けてきたおもちゃづくりワークショップは、市内の小学生が親子で博物館を訪れるきっかけとなっています。しかし、ワークショップ以外の部分、常設展示や企画展も含めて博物館をより楽しんでもらう仕掛けが足りないことが課題でもありました。このため、学芸員と子どもたちが直接やり取りをして、実物を見ながら楽しく歴史に触れる内容を目指して、昨年は「れきはくキッズミュージアム」を新たに開催しました。4種類の体験型イベントとして、江戸時代のくずし字を手本に自分の名前を書く、廃線となった江若鉄道の関連品を手に取って調べてみる、パズルをしながら近江八景に描かれた景色を楽しむ、古代の土器に実際に触れてみるという内容でおこないました。手探りの部分が多く、内容や告知が行き届かなかったところもあったのですが、参加者の方には好評で、83人（うち子ども51人）にご参加いただき、新聞でも大津歴博の新たな取り組みとして取り上げてもらうことができました。

れきはくキッズミュージアムのようす

そして今年は、これまでの「おもちゃ制作」と「その作品展示」という形から少しリニューアルします。主軸として「昔のくらし」をテーマとした体験型の展示を博物館と学生が協力して開催し、その中で例年通りのおもちゃづくりを含めた複数のワークショップをおこなう予定です。「昔のくらし」は小学校3年生の授業でも扱われる内容なので、観てもらうだけの展示ではなく、実物の道具に触れ、展示室の中を探検しながら観られるような仕掛けを考えています。ぜひ、この夏も歴博へ遊びにきてください。

（学芸員　福庭万里子）

活　動　報　告

パリ大津絵展開催記念シンポジウム「大津絵・民芸・ヨーロッパ」

現在、フランス・パリでヨーロッパ初となる大規模な大津絵展が開催されています。これを記念したプレイベントとして、昨年12月22日（土）に、大津市・ピアザ淡海において記念シンポジウムを開催し、市内外から313人の方にご参加いただきました。

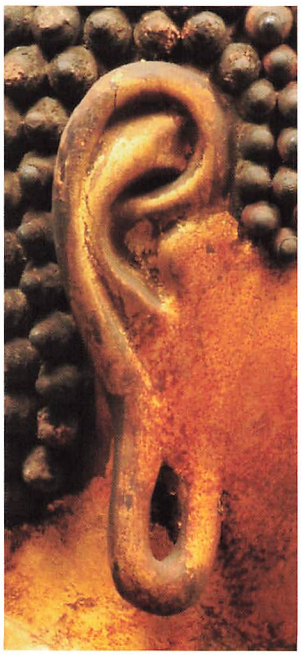
近代以降、欧米諸国では日本美術が注目されてきましたが、その中には大津絵も含まれていました。シンポジウムでは、大津絵の表現が欧米でどのように受け止められたのか、専門家お二人の講演と討論で迫りました。

熊倉功夫先生（MIHO MUSEUM 館長）は、大津絵の再評価につながった大正時代の柳宗悦の民芸運動を取り上げ、柳が作家性によらない手わざの美や作品の性格から民画として大津絵を称賛したことや、1930年にアメリカ・ハーバード大学附属フォッグ美術館で開催された「大津絵展」について紹介されました。また、今回のパリでの大津絵展の監修者であるクリストフ・マルケ先生（フランス国立極東学院院長、びわ湖大津 PR 大使）からは、ピカソやルロワ=グーラン、ゴミス、セラなど、ヨーロッパの研究者や芸術家たちの間で、大津絵がどのように受け入れられたのかを解説いただきました。

今秋に本館でおこなう大津絵展でも、改めて欧米からの視点に注目しながら、大津絵を紹介します。

大津市富士見台に、圓福院（えんぷくいん）という天台宗寺院があります。ここに鎌倉時代の秀逸な釈迦如来坐像が伝来していました。今回はこのお像との不思議なご縁のお話をしたいと思います。本像は写真をご覧になっておわかりのように、目尻の上がったきりっとしたお顔だちで、なんとなく鎌倉時代初期に活躍した「快慶」の作例に似た雰囲気を持っています。さらに像内には「建久八年十月十二日　安阿弥陀仏　御作」の墨書銘があります。「アン阿弥陀仏」は快慶の法名ですから、本像の作者は快慶だと思われてきたのです。

ところが、昭和37年（1962）に、仏像の研究者である水野敬三郎先生（現、東京藝術大学名誉教授）が「快慶作品の検討」という論文を発表しました。これによれば、「仏像は発願者の依頼によってその造形が左右されるものですが、耳はその影響を受けにくい場所です。ゆえに仏像の耳の形を比較することが仏像の作者を判定する上で、極めて有効な方法であります。そこで作例が豊富にある快慶の、銘文がある像の耳を集めてみた結果、快慶の造る像の耳の形、つまりくせが把握できました」と。さらに「大津市の圓福院所蔵の釈迦如来像は、耳の形が明らかに異なっており、快慶とは違う作者である可能性が高い」と結論付けました。つまり本像は、銘文があるにもかかわらず、耳の形が違うために快慶作であることを否定されてしまったのです。この研究は、仏像の作者判断に耳の形の検討がとても有効であることがわかったという画期的なもので、今に至るまで重要な手法として知られています。ちなみにこの水野先生の御説を発展させた話を、私は平成25年（2013）に東京文化財研究所で発表。幸運にも先生にも聴いて頂き、まさに50年ぶりに快慶の耳の研究が進んだとのお言葉を頂きました。なので、快慶の耳は私にとっても特別な思い入れのあるものです。



収蔵品紹介

重要文化財　釈迦如来坐像　鎌倉時代　圓福院蔵

昨秋、本像は諸事情により当館で預かることとなり、たまたま「神仏のかたち」という仏像展を開催中だったので、急遽、特別展示することにしました。すると偶然にもその1週間後に水野先生がご来館され、くしくも先生の耳の研究の出発点となった圓福院像を、50年後に発展させた私と一緒に観ることになったのです。半世紀以上ぶりの御対面だそうでとても懐かしがられ、当時の貴重なお話を伺えました。そして「やっぱり快慶とは違う耳だよね。快慶じゃないね」と、二人して楽しく確認し合ったのでした。自分が苦労して展示した作品をみて、観覧者が喜ぶさまを見るのは、学芸員としてとてもうれしいことです。ましてさまざま研究上の因縁があればなおさらです。まさに学芸員冥利（みょうり）に尽きる瞬間でした。

本像は「快慶作ではない」ということによって現在の仏像研究に役立ち、さらに全国で行われている今の仏像展につながっています。快慶の造立ではなかったけど、それはそれで良かったことだと、収蔵庫でお顔を拝するたびに思うのです。でも快慶ではなくていったい誰が作ったのか…？それはいまだに謎のままです。

（学芸員　寺島典人）